博士論文（要約）

論文題目　戦前の東京における映画館の音楽文化

氏　　名　柴田　康太郎

目次

序章 1
第 1 部 サイレント期の洋画専門館における洋楽合奏の規範化と土着化 11
第 1 章 洋画専門館における観客の洋楽受容：休憩奏楽と映画伴奏の相互関係 13
1.1 1920 年前後の洋画専門館における「洋楽」への熱狂 15
1.2 洋画上映館における観客の要望と映画文化の近代化 19
1.3 1920 年前後の映画観客における伴奏音楽に対する関心の諸相 23
結 28
第 2 章 洋画専門館における映画伴奏と映画説明 29
2.1 初期の映画興行における音楽演奏の変容 30
2.2 映画伴奏への関心の高まりと映画説明 37
2.3 映画説明の改革と映画伴奏の模索 46
結 56
第 2 部 サイレント期の邦画上映館における邦画伴奏の再編成 57
第 3 章 大正期の日本映画における伴奏音楽の「洋楽化」と純映画劇運動 60
3.1 1910 年代の邦画上映館における音楽演出 61
3.2 純映画劇運動と洋楽伴奏：天活の帰山教正の実践 65
3.3 松竹キネマと邦画上映館における洋楽伴奏 70
3.4 1920 年代の邦画上映館の休憩奏楽：音楽と記憶の交差 76
結 79
第 4 章 日活作曲部の日活配給選曲譜と松平信博：洋楽伴奏の「規範化」の諸相 81
4.1 日活作曲部の試み：洋楽伴奏を支える仕組み 82
4.2 松平信博の伴奏音楽観：純映画劇運動の反アトラクション志向 88
4.3 松平信博の浅草三友館における映画劇伴奏の実践 93
結 99
第 5 章 邦画上映館における琵琶映画／琵琶伴奏 100
5.1 純映画劇運動前後の琵琶弾奏 101
5.2 小唄映画と琵琶映画 104
5.3 映画に伴う琵琶弾奏：吉田知恵男旧蔵台本 106
結 111
第 6 章 1920 年代後半の時代劇伴奏における複層的な和洋折衷: 和洋合奏・選曲・新作曲 112

6.1 日活時代劇の興行実践と和洋合奏の導入：浅草富士館の実践 113
6.2 日活時代劇における折衷的選曲：神田日活館における選曲実践 118
6.3 松平信博の時代劇伴奏曲：折衷的伴奏曲の実態 125
結 130
第 3 部 トーキー初期の日本映画における洋楽伴奏の再規範化 132
第 7 章 トーキー転換期の映画館における音楽メディアとしてのトーキー 139
7.1 トーキーを介したアメリカのサイレント映画伴奏の到来 141
7.2 伴奏音楽の規範性に対する疑義：洋画トーキーをめぐるトーキー音楽論 144
7.3 松竹サウンド版映画の音楽・音響実践と興行 150
結 156
第 8 章 邦画トーキーにおける洋楽伴奏の再規範化 158
8.1 トーキー映画の音楽における新作曲と既成曲 161
8.2 トーキー映画の撮影所における音楽演出の模索 166
8.3 トーキー化による洋楽伴奏の再規範化と観客の音楽感覚 171
結 175
第 9 章 トーキー映画における「語り」と音楽：浪曲映画の管弦楽伴奏 177
9.1 浪曲映画『佐渡情話』のヒットと邦楽トーキーの試み 178
9.2 浪曲トーキーとトーキー的手法としての「ナラタージュ」 182
9.3 浪曲映画における浪曲と伴奏音楽：関係性の変容 186
結 195
第 10 章　1930 年代後半の日本映画における「リアリズム」： 伴奏音楽無用論と深井史郎の映画音楽 196
10.1 1930 年代半ば～後半の日本映画界における「リアリズム」論 198
10.2 映画の「リアリズム」論と伴奏音楽無用論 200
10.3 深井史郎のリアリズム映画での伴奏音楽無用論 204
10.4 深井史郎によるリアリズム映画のための伴奏音楽の模索 207
結 211
終章 213
参考文献 216

本文

5 年以内に出版予定

参考文献

参考文献表では「一次文献」に考察対象と同時代の資料および同時代人による証言資料を、「二次文献」に第二次大戦後以後の論者・研究者による文献を掲載した。また一次文献の記載にさいしては、本論文では雑誌記事を多く扱う都合上、通例と異なり、著者名の後に雑誌等の発行年月日を記し、同年の異なる記事との差別化を図った。また映画館プログラムは数が多いため、本文中にのみ記した。

一次文献（記名記事）

暁鶏 1913.10 「三友館 The Sanyu-Kan」『フィルム・レコード』第 1 巻 2 号, 13-14.

飯島正 1924.1.21 「日本映画欄 峠の唄」『キネマ旬報』第 148 号, 8.

——— 1933.10.21 「僕の切抜帳から」『キネマ旬報』第 486 号, 60-61.

——— 1955 『日本映画史（上）』東京：白水社.

——— 1974 「大正八年（一九一九）の日記」『映画史研究』第 6 号, 1-14.

——— 1975 「大正八年（一九一九）の日記（后）」『映画史研究』第 7 号, 1-9.

——— 1991 『ぼくの明治・大正・昭和：自伝的エッセー』東京：青蛙房.

生田清治 1922.6.21 「映写幕」『東京朝日新聞』.

——— 1923.1.14 「寸鐵録」『Shochikukan News』第 38 号.

——— 1923.1.30 「映写幕」『東京朝日新聞』.

池田壽夫 1929.4.21 「小唄映画の一考察」『キネマ旬報』第 328 号, 93.

石井迷花 1923.6 「キネマ音楽の向上に就て」『活動画報』第 7 巻 6 号, 28-29.

——— 1925 「日本映画界の現在及び将来に就て」石井文作編『大正拾五年版　日本映画事業総覧』東京：国際映画通信社, 1-22.

伊丹万作 1936.12 「私の活動写真傍観史」『伊丹万作全集 2』東京：筑摩書房, 1961, 387-409.

——— 1961「映画と音楽」『伊丹万作全集 2』東京：筑摩書房, 32-37.

一記者 1920.5 「活動写真と音楽」『活動画報』第 4 巻 5 号, 77.

一記者 1923.5 「日本に於ける純映画劇発達史」『活動雑誌』第 9 巻 5 号, 94-96.

一記者 1924.12 「小唄映画の流行で生れた新職業：スクリーンの陰に咲く小唄歌ひ女の生活」『活動雑誌』第 10 巻 12 号, 102-107.

井手百合子 1916.7 「カビリア見物の一夜」『活動之世界』第 1 巻 4 号, 16.

伊藤宣二 1935.11 「「東京の宿」から」『音楽世界』第 7 巻 11 号, 140-43.

——— 1935.11.11 「映画音楽の軌道」『キネマ旬報』第 558 号, 79-80.

伊藤昇 1931.4 「音楽及び音響効果に関する考察〔1〕」『映画科学研究』第 8 号, 28-44.

——— 1931.9 「音楽及び音響効果に関する考察〔2〕」『映画科学研究』第 9 号, 37-45.

——— 1935.9 「トーキー音楽の理想」『会館芸術』第 4 巻 9 号, 16-17.

——— 1936.6 「トオキイ音楽 映画「桃中軒雲右衛門」の音楽記録」『トオキイ音楽』第 2 巻 4 号, 18 -22. ※伊藤能矛留名
——— 1938.6a 「トオキイ音楽作曲に関する問題」『映画評論』第 20 巻 5 号, 41-49.
——— 1938.6b 「誰が映画を作るか」『東宝映画』第 1 巻 4 号, 28-29.
稲垣浩 1978 『日本映画の若き日々』東京：中央公論社, 1983.
伊庭孝 1929.8 「今こそ向上の機会だ」『フィルハーモニー』第 3 巻 8 号, 11.
——— 1930.4.1 「トーキーの諸相」『キネマ旬報』第 361 号, 68-69.
今村太平 1939.4 「リアリズムの音」『映画芸術の性格』174-80.
岩崎昶他 1939.6 「土を繞る座談会」『映画之友』第 17 巻 6 号, 80-84.
岩崎純孝 1929.7 「狼の唄・レッドスキン・其他」『映画往来』第 5 巻 7 号, 20-21.
梅島昇 1932 「和洋合奏」『劇界へのへのもへじ』東京：宝文館, 129-33.
A 記者 1930.5 「田中豊明さんと映画館」『音楽世界』第 2 巻 5 号, 78-79.
江田不識 1910.7 「活動写真映写法（二）音楽隊」『活動写真界』第 7 号, 6-7.
——— 1910.8 「活動写真映写法（三）囃子、台詞」『活動写真界』第 8 号, 7-8.
遠藤志郎 1924.6 「自由論壇　時代映画音楽解説論」『活動雑誌』第 10 巻 6 号, 133.
大蔵貢 1958.7.5 「月給５円で葵館に入る／大当たりの”カチューシャ”」『読売新聞』.
大谷荒太郎編 1922 『現代琵琶名人録：附・最近琵琶発達史』東京：登文閣出版部.
大塚恭一 1934.11 「映画批評　佐渡情話　日活京都」『映画評論』第 16 巻 11 号, 82-83.
——— 1935.5 「映画批評　召集令　日活京都」『映画評論』第 17 巻 5 号, 251-52.
岡本かの子 1927.1 「私の見た活動」『岡本かの子全集 11』東京：筑摩書房, 1994, 193-97.
小津安二郎他 1935.4.1「日本映画監督研究四　小津安二郎座談会」『キネマ旬報』第 536 号, 171-78.
小野金次郎 1929.7 「映画の伴奏音楽界より観たるトーキイの出現：「レッド・スキン」の公開を中心として」『フィルハーモニー』第 3 巻 7 号, 6-7.
おぼろ月 1913.10.24 「帝国館」『フィルム・レコード』第 1 巻 2 号, 9-10.
帰山教正 1917 『活動写真劇の創作と撮影法』東京：飛行社.
——— 1921 『増補再版 活動写真劇の創作と撮影法』東京：正光社.
——— 1928.5.11 「映画の説明と音樂を蓄音機によつて代用の可能性に就て」『キネマ旬報』第 295 号, 31-32.
——— 1928.7.21 「発声映画が米国で盛んになって行く理由」『キネマ旬報』第 302 号, 33-34.
——— 1928.8.10 「映画芸術協会少史」『国際映画新聞』第 18 号, 22-23.
——— 1929.10 「映画劇制作の思い出」岡部編『日本映画史素稿 8：帰山教正とトーマス栗原の業績』東京：フイルム・ライブラリー協議会 1973, 35.
楽仙 1917.4 「弁士と楽士」『フィルム画報』第 2 号, 29-30.
掛下慶吉 1936.7 「劇トオキイに於ける音楽処理法」『音楽世界』第 7 巻 7 号, 143-47, 58.
——— 1936.10 「『兄いもうと』の音楽構成」『音楽世界』第 5 巻 10 号, 119-22.
——— 1942 『映画音楽の創作と録音機構』東京：新興音楽出版社.

――― 1943 『映画と音楽』東京：新興音楽出版社.
掛下慶吉他 1936.11「トーキーに於る音楽と映画の実際」『音楽世界』第 8 巻 11 号, 128-151.
柏木佳夫 1933.5.21 「読者寄書欄 『一つの提唱』：日本トーキー前進の為に」『キネマ旬報』第 471 号, 56-57.
嘉田重朗 1933.1.21 「トオキイに於ける伴奏楽と伴奏楽的効果」『キネマ旬報』第 459 号, 63-64.
合評同人 1923.6 「東洋キネマ音楽団同人合評」『活動画報』第 7 巻 6 号, 38-39.
――― 1923.7 「武蔵野館音楽団合評」『活動画報』第 7 巻 7 号, 64-68.
――― 1923.8 「浅草電気館音楽団合評」『活動画報』第 7 巻 8 号, 117-21.
――― 1923.9 「キネマ倶楽部音楽団合評」『活動画報』第 7 巻 9 号, 83-85.
金指栄一 1930.5.10 「支配人の為めに執筆せる常設館に於ける音楽及伴奏上の諸問題」『国際映画新聞』第 39 号, 9-13.
紙恭輔他 1935.9 「日本の映画音楽と音楽的映画に就いて語る座談会」『音楽世界』第 7 巻 9 号, 94-112.
河合太郎 1934 「田中豊明氏の死を弔う」『月刊楽譜』第 23 巻 3 号, 76-77.
神田弦之助 1936.10 「和洋合奏考：オーケストラマニア」『社会及国家』第 247 号, 73-76.
菊池寛 [1920]1938 「予の浅草観」『菊池寛全集 14』東京：中央公論社.
岸松雄 1935.1.11 「主要日本映画批評 与太者と小町娘」『キネマ旬報』第 528 号, 78.
――― 1935.11 「島津保次郎 成瀬巳喜男のトーキー問答」『映画之友』第 13 巻 12 号, 66-67.
――― 1936.2.11 「主要日本映画批評 新佐渡情話」『キネマ旬報』第 566 号, 138.
北川冬彦 1932.7.1 「主要日本映画批評 天国に結ぶ恋」『キネマ旬報』第 440 号, 87.
――― 1932.10.21 「説明、サイドタイトル、スーパーインポーズ・其他」『キネマ旬報』第 451 号, 45.
――― 1933.9.1 「主要日本映画批評 さすらひの乙女」『キネマ旬報』第 481 号, 156.
――― 1934.11.1 「主要日本映画批評 佐渡情話」『キネマ旬報』第 522 号, 106.
――― 1941 『現代映画論』東京：三笠書房.
来代亀蔵 1897.6 「シチマトグラフヲ観ル」『少年倶楽部』第 1 巻 6 号, 33.
衣笠貞之助 1977 『わが映画の青春：日本映画史の一側面』東京：中央公論社.
君塚篁陵 1925.1 「琵琶劇大勝利」『琵琶新聞』第 185 号, 39.
Q 1934.6.16 「新映画評 「力と栄光」（The power and the glory）（フォックス映画）新形式の作品 銀幕に返咲きしたムーア 久しぶりに妙技」『東京朝日新聞』.
――― 1935.5.1 「映画と演芸／新映画評／「長崎留学生」（新興映画） 新人野淵監督の作品」『東京朝日新聞』.
清瀬英次郎他 1936.2 「浪曲トーキー座談会」『キネマ』第 11 巻 2 号, 68-71.
久保田公平 1937.9 「音楽追放」『音楽世界』第 9 巻 9 号, 150-52.
蔵田国正 1935.3 「折鶴お千」『映画評論』第 17 巻 3 号, 115-16.
倉滿信政・伊神秀男 1919.4 「史劇と音楽」『活動之世界』第 4 巻 4 号, 18-19.

来島雪夫 1936.7 「映画とリアリズム」『映画評論』第 18 巻 7 号, 48-51.
紅琴子 1913.11.24 「富士館」『フィルム・レコード』第 1 巻 4 号, 16-17.
桑野桃華 1924.7 「離れられぬ仲：音楽と映画の巻頭へ」『音楽と映画』第 3 巻 7 号, 2.
乾雲坤龍 1938.10 「東京映画館診てある記 : 浅草の巻」『日本映画』第 3 巻 10 号, 106-107.
——— 1938.11 「東京映画館診てある記：続・浅草の巻」『日本映画』第 3 巻 11 号, 118-19.
建築写真類聚刊行会編 1924 『建築写真類聚 第 4 期 第 17 回 活動写真館』東京 : 洪洋社.
五所平之助 1933.4.11 「映画人はかく見る 3 銀座の柳 東京盛り場を巡る（上）」『東京朝日新聞 』.
——— 1934.6 「日本トーキーの断片的報告」『音楽世界』第 6 巻 6 号, 57-62, 22.
小竹昌夫 1934.11 「日本音楽と日本映画に就いての小観」『映画評論』第 16 巻 11 号, 48-53.
小林いさむ 1933 『映画の倒影』東京：伊藤書房.
小船幸次郎 1940.1 「消えてゆくトーキー音楽」『映画と音楽』第 4 巻 1 号, 36-37.
権田保之助 1914 『活動写真の原理及応用』東京：内田老鶴圃.
——— 1921 『民衆娯楽問題』東京：同人社書店.
——— 1923a 「映画説明の進化と説明芸術の誕生」『権田保之助著作集 4』東京：文和書房, 1975, 119-29.
——— 1923b 「民衆娯楽」『権田保之助著作集 4』東京：文和書房, 1975, 72-82.
近藤経一 1927.9 「「うつりゆくお盆」電気館」『映画時代』第 3 巻 3 号, 7-9.
早乙女光・吉村公三郎 1936.5 「「男性対女性」のこと」『音楽世界』第 8 巻 5 号, 154-58.
酒井眞人 1929.6.7 「トーキー反対」『東京朝日新聞』朝刊, 5.
佐多稲子 1949 『私の東京地図』東京：講談社, 2014.
佐藤泰雄 1923.6 「各音楽団瞥見記」『活動画報』第 7 巻 6 号, 34-36.
サバニエフ、レオニイド 1938 『トオキイ音楽の理論と実際』掛下慶吉訳 東京 : 赤塚書房.
澤村勉 1936.2 「新佐渡情話」『映画評論』第 18 巻 5 号, 169-70.
——— 1936.7「映画的リアリズムのために」『現代映画論』東京：桃蹊書房, 65-81.
——— 1942 『映画の表現』東京：菅書店, 231-32.
鹽入亀助 1929.7 「映画音楽伴奏家は何処へ行く？：トーキー問題是々非々〔巻頭言〕」『フィルハーモニー』第 3 巻 7 号, 4-5.
——— 1929.8 「機械音楽時代来るか：トーキーから導かれた一つの考へ」（特集 続トーキーの問題）『フィルハーモニー』第 3 巻 8 号, 12-15.
——— 1936.4 「日本のトーキー音楽」『日本映画』第 1 巻 1 号, 78-80.
——— 1937.6 「映画音楽月評」『日本映画』第 2 巻 6 号, 49-51.
——— 1937.8 「映画音楽月評」『日本映画』第 2 巻 8 号, 104-05.
——— 1937.10 「映画音楽月評」『日本映画』第 2 巻 10 号, 68-73.
鹽野初男 1934.9.21 「映画話術としてのナラタージュ」『キネマ旬報』第 518 号, 84.
滋野辰彦 1932.9.1「音響に関する感想」『キネマ旬報』第 446 号, 67-68.

紫香生 1915.2 「活動写真の音楽」『音楽界』第 160 号, 20-23.
獅子文六 2006 『ちんちん電車』東京：河出書房新社.
島田晴誉 1923.6 「最近著しく進歩した活動常設館の聴衆」『活動画報』第 7 巻 6 号, 40-41.
——— 1938.11 「映画音楽二十年」『音楽世界』第 10 巻 11 号, 44-50.
島津保次郎・堀内敬三 1935.11 「映画と音楽に就て語る」『音楽世界』第 7 巻 11 号, 126-39.
島村抱月 1916.5「活動写真の真に盛んな時代」『活動之世界』第 1 巻 5 号, 18-19.
清水俊二 1985 『映画字幕五十年』東京：早川書房.
社説 1921.5 「映画界の四快事とは何か」『活動画報』第 7 巻 5 号, 72-75.
春羊 1914.1.10 「金竜館」『キネマ・レコード』第 2 巻 6 号, 39-40.
新海緑 1918.12 「目覚る時は今：新派劇の映画伴奏に就て」『活動画報』第 2 巻 12 号, 10-13.
巣 1929.6.2 「新映画評　「レッド・スキン」（パ社映画）」『東京朝日新聞』.
——— 1929.8.3 「新映画評　蜂須賀小六　日活映画」『東京朝日新聞』.
杉崎倉之助　1918.12 「活動写真と音楽の調和に就て」『活動画報』第 2 巻 12 号, 14-17.
杉本峻一 1937.9 「映画音楽雑記」『音楽世界』第 9 号 9 巻, 146-48.
杉山平一 1936.7 「キャメラの素質としての写実」『映画評論』第 18 巻 7 号, 70-72.
——— 1938.4 「トオキイの声」『映画と音楽』第 2 巻 3 号, 23-25.
——— 1941 『映画論集』東京：第一芸文社.
鈴木重三郎 1934.3.11 「主要日本映画批評　歓楽の夜は更けて」『キネマ旬報』第 499 号, 112.
説明者同人会編 1926 『映画説明者になる近道』大阪：説明者同人会.
芹沢潤 1934.10 「映画批評　唄祭三度笠　日活京都」『映画評論』第 16 巻 10 号, 133-35.
園部三郎 1942.3 「忠臣蔵後篇を観る」『日本映画』第 7 巻 3 号, 70-73.
——— 1942.4 「日本映画と音の世界：思ひつくまゝに」『日本映画』第 7 巻 4 号, 32-37.
——— 1950 『音楽五十年』東京： 時事通信社.
染井三郎 1916.10 「琵琶応用の説明」『活動写真雑誌』第 2 巻 10 号, 128-29.
竹泉平三九 1968.1.15 「映画音楽よもやま話」『映画史料』第 16 号, 10-11.
——— 1969.10 「連続活劇伴奏考」『映画史料』第 17 号, 23-24.
武田晃 1931.5.11 「日本發聲映画迂史の一頁：東條式トーキーに關するメモ」『キネマ旬報』第 400 号, 76-78.
武田忠哉 1928.7.1 「「つばさ」の演出記録」『キネマ旬報』第 297 号, 49-50.
田中三郎他 1935.1.1 「全国映画界行脚座談会」『キネマ旬報』第 527 号, 59-66.
——— 1935.1.11 「全国映画界行脚座談会」『キネマ旬報』第 528 号, 27-30.
——— 1935.2.1 「全国映画界行脚座談会」『キネマ旬報』第 530 号, 29-32.
田中純一郎 1922.9 「映画常設館に於ける拍手のいろいろ」『活動倶楽部』第 5 巻 9 号, 58-60.
田中武 1936.7 「映画リアリズム寸見」『映画評論』第 18 巻 7 号, 82-85.

田中豊明 1928.7a 「映画の伴奏」『日活映画』 第 4 巻 7 号, 76-77.
——— 1928.7b 「楽は苦の種：映画音楽一夕話」『映画時代』第 3 巻 7 号, 47-49.
——— 1930 「伴奏音楽の改善」『国際映画新聞』第 39 号, 14-15.
——— 1931.1 「映画伴奏は出来るだけ微細に且つ親切に」『国際映画新聞』第 48 号, 40.
谷崎潤一郎 1920.5.9 「改造を要する日本の活動写真」『読売新聞』.
——— 1920.11.21 「私の最初の映画 アマチユア倶楽部」『読売新聞』.
塚谷晃弘 1938.4 「トーキー音楽とその作曲家」『音楽倶楽部』第 5 巻 4 号, 22-27.
——— 1940.1 「映画音楽三題」『映画と音楽』第 4 巻 1 号, 44-46.
塚本靖 1936.5 「トーキーの音楽に関する断片：伴奏音楽否定論その他」『音楽世界』第 8 巻 5 号, 142-47.
津川主一 1942.1 「『元禄忠臣蔵』の音楽」『日本映画』第 7 巻 1 号, 114-115.
———1953 「映画音楽」『映画講座 第二巻』東京：三笠書房, 119-129.
堤友次郎 1923.1 「松竹キネマの現状と抱負」『活動画報』第 7 巻 1 号, 36-37.
出口競 1922 『映画脚本の書き方』東京：正光社.
天然居士 1919.2.8 「音楽部遠藤様へ」『第一新聞』第 150 号, unpagad.
徳川夢声 1925.6 「『ジーグ・フリード』の説明に際して」『活動雑誌』第 11 巻 6 号, 103.
——— 2010 『徳川夢声のくらがり二十年』東京：清流出版.
友田純一郎 1934.11.1 「主要日本映画批評　佐渡情話」『キネマ旬報』第 522 号, 106.
中川信夫 1933.1.1 「「また逢ふ日まで」の小津安二郎に就いて」『キネマ旬報』第 457 号 , 113-14.
永田錦心 1925.5 「琵琶の劇と舞踊とに就いて」『水聲』第 188 号, 2-3.
長田幹彦他 1924.8 「女殺油地獄合評記」『蒲田』第 3 巻 8 号, 35-42.
中根宏 1932 『トオキイ音楽論』東京：往来社.
中野二郎（華人） 1916.3「活動写真と音楽 I」『キネマ・レコード』第 4 巻 33 号, 104.
——— 1916.4 「活動写真と音楽 II」『キネマ・レコード』第 4 巻 34 号, 152.
——— 1916.5 「活動写真と音楽 III」『キネマ・レコード』第 4 巻 35 号, 201.
——— 1916.6 「活動写真と音楽 VI[=IV]」『キネマ・レコード』第 4 巻 36 号, 248-49.
——— 1916.7 「活動写真と音楽 VII[=V]」『キネマ・レコード』第 4 巻 37 号, 298.
——— 1916.8 「活動写真と音楽 VIII [=VI]」『キネマ・レコード』第 4 巻 38 号, 237.
——— 1916.9 「活動写真と音楽 IX[=VIII]」『キネマ・レコード』第 4 巻 39 号, 412-13.
——— 1916.10 「活動写真と音楽[=IX]」『キネマ・レコード』第 4 巻 40 号,　462.
——— 1916.12 「活動写真と音楽 XII [=X]」『キネマ・レコード』第 4 巻 42 号, 541.
——— 1917.2「活動写真と音楽 XIII [=XI]」『キネマ・レコード』第 5 巻 44 号, 64-65.
——— 1917.5 「活動写真と音楽 [XII]」『キネマ・レコード』第 5 巻 47 号, 223.
中原春花庵 1912.6 「オペラ館の琵琶劇」『琵琶新聞』第 37 号, 1.
なめらぎ 1917.4 「発刊の辞に代へて：我が〔国〕演劇と外国映画劇」『フィルム画報』第 2 号, 3-4.
成瀬巳喜男 1934.10 「技巧のことなど」『映画芸術研究』第 2 巻 10 号, 70-75.

——— 1936.5 「トオキイ伴奏への私観」『音楽世界』第 8 巻 5 号, 152-53.
西岡篁村 1922.1 「活動写真付琵琶師の生活」『琵琶新聞』第 151 号, 37.
パウエル, A. L 1918.8.21 「映画館における音楽補助としての色彩証明に就いて（2）」村上久雄訳『キネマ旬報』第 302 号, 81-82.
——— 1928.8.1 「映画館における音楽補助としての色彩証明に就いて（1）」村上久雄訳『キネマ旬報』第 302 号, 58.
長谷部慶次 1986 「映画におけるオトの噺」市川崑他『講座日本映画 2』東京：岩波書店, 64-80.
波多野鐵次郎 1923.6 「伴奏楽と休憩楽」『活動画報』第 7 巻 6 号, 42-43.
——— 1942.10 「民衆音楽の時代を語る」『音楽の友』第 2 巻 10 号, 100-105.
波多野福太郎 1920.1 「形容音楽の目的（金春館名物 形容音楽の話」」『活動雑誌』第 6 巻 1 号, 176-177.
服部正 1938.6 「トオキイ音楽の路」『映画評論』第 20 巻 5 号, 37-40.
筈見恒夫 1935.12.1 「映画リアリズムの提唱」『キネマ旬報』第 560 号, 75-76.
——— 1942 『映画五十年史』東京：鱒書房, 1947.
埴谷雄高 1977 「古い映画手帖」野間宏編『文学的映画論』東京：中央公論社, 133-65.
埴谷雄高・丸山眞男 1978.3「文学の世界と学問の世界」『埴谷雄高全集 15』東京：講談社, 2000, 186-210.
原善一郎 1929.7 「トーキー雑感」『フィルハーモニー』第 3 巻 7 号, 9.
春之助 1917.5 「フヰルムフレンド よしなき事々 春之助」『フィルム画報』第 3 号, 45-46.
東坊城恭長 1929.6 「思い出ぞ懐かしい　こんぱる・まーち」『映画時代』第 4 巻 6 号, 36-37.
久江京四郎 1929.4 「第一新聞を憶ふ」『映画時代』第 4 巻 4 号, 96-98.
平山笑月 1924.1 「大正拾二年の映画で私の印象に残ったもの」『活動画報』第 10 巻 1 号, 62-64.
広瀬将 1928 「無題欄 映画伴奏の実際」全 9 回, 第 289-300 号.
深井史郎 1934.9 「音画芸術に於けるコントルポワンとアルモニイ」『トオキイ音楽』第 1 巻 7 号, 392-98.
——— 1935.6 「トーキーの音楽に関する雑文」『会館芸術』第 4 巻 6 号, 18-19.
——— 1935.9 「「長崎留学生」録音の記録」『音楽世界』第 7 巻 9 号, 118-20.
——— 1936.7 「映画「あにいもうと」を観る」『音楽世界』第 8 巻 7 号, 150-53.
——— 1937.6.21 「僕の好きなトーキー作家」『キネマ旬報』第 630 号, 6-7.
——— 1937.10 「トーキー音楽論以前」『音楽評論』第 6 巻 10 号, 106-111.
——— 1937.11 「トーキー音楽論以前（承前）」『音楽評論』第 6 巻 11 号, 31-37.
——— 1937.12 「トーキー音楽論以前（三）」『音楽評論』第 6 巻 12 号, 84-87.
——— 1938.4.21 「時代劇映画と音楽」『早稲田大学新聞』第 102 号, 8.
——— 1938.6 「トーキー音楽の覺え書 」『映画評論』第 20 巻 5 号, 32-36.
——— 1946.9 「映画音楽覚え書」『映画春秋』第 1 巻 2 号, 26-29.

深井史郎・衣笠貞之助 1936.10 「対談「映画と音楽」の諸角度」『音楽世界』第 8 巻 10 号, 122-28.
深井史郎他 1938.1 「座談会 映画と音楽を語る：オーケストラの少女を中心に」『映画と音楽』第 2 巻 1 号, 126-42.
———1938.4.20 「トーキー音楽の作品と諸問題批判（三）」『音楽新聞』, 2.
———1938.8 「トーキー音楽と録音について語る」『映画と音楽』第 2 巻 6 号, 30-43.
———1942.12 「座談会・映画音楽の検討」『音楽之友』第 2 巻 12 号, 44-67.
古川緑波 1930 「わが国の小唄映画」『昭和四・五年度版 映画年鑑』朝日新聞社, 63.
——— 1930.12 「トオキイ説明」『映画往来』第 6 巻 8 号, 33-35.
編集局 1923.2 「「幽魂の焚く炎」合評」『活動画報』第 7 巻 2 号, 46-57.
編集局 1923.3 「第一回映画説明振り合評」『活動画報』第 7 巻 3 号, 64-75.
編集局 1923.5 「第三回映画説明振り合評」『活動画報』第 7 巻 5 号, 88-89.
編集部 1934.10.21 「映画館景況調査」『キネマ旬報』第 521 号, 33-36.
北載河 1937.12.1 「木枯抄」『キネマ旬報』第 630 号, 8-9.
星暁 1923.6 「映画音楽の一考察」『活動画報』第 7 巻 6 号, 34-37.
堀内敬三
——— 1930.2.25 「トーキー音楽観（1）」『読売新聞』朝刊, 10.
——— 1930.2.26 「トーキー音楽観（2）」『読売新聞』朝刊, 10.
——— 1930.2.27 「トーキー音楽観（3）」『読売新聞』朝刊, 6.
——— 1930.7 「近頃見たトーキーの音楽批判」『映画時代』第 7 巻 4 号, 22-25.
——— 1931.1.1 「日本製トーキーへの待望」『キネマ旬報』第 387 号, 93-94.
——— 1932.4.1 「映画音楽が移って行く」『キネマ旬報』第 431 号, 57-58.
——— 1932.11.25 「耳で調べたトーキー」『東京朝日新聞』朝刊, 6.
——— 1933 『音楽家を志す人のために』東京：現人社.
——— 1934.4 「『にんじん』の伴奏音楽」『トオキイ音楽』第 1 巻 3 号, 227-228.
——— 1934.5 「日本トーキーへの第二歩」『月刊楽譜』第 23 巻 5 号, 8-10.
——— 1934.6 「松竹トーキー「さくら音頭」の音楽監督をした話」『音楽世界』第 6 巻 6 号, 63-70.
——— 1934.7.11 「音楽映画随想」『キネマ旬報』第 511 号, 68.
——— 1934.9 「映画音楽随想」『トオキイ音楽』第 1 巻 7 号, 425-29.（『ヂンタ以来』採録、81-87.）
——— 1934.11 「映画音楽の実際」『映画評論』第 16 巻 11 号, 35-41.
——— 1935 『ヂンタ以来』東京：アオイ書房.
——— 1935.5 「トーキー音楽論：第一講 トーキー音楽の概観」『月刊楽譜』第 24 巻 5 号, 74-81.
——— 1935.6 「トーキー音楽論：第二講 現実性と非現実性」『月刊楽譜』第 24 巻 6 号, 29-36.
——— 1935.7 「トーキー音楽論：第三講 音楽と劇との対比（続）」『月刊楽譜』第 24 巻 7 号, 32-35.

——— 1935.8 「トーキー音楽論：第四講 音楽のトーキー的処理（続）」『月刊楽譜』第24巻8号, 46-48.
——— 1935.9 「トーキー音楽講座：第一回 トーキー音楽と一般の音楽」『映画之友』第13巻10号, 50-51.
——— 1935.10 「トーキー音楽講座：第二回 トーキー音楽の領土」『映画之友』第13巻11号, 50-51.
——— 1935.11 「トーキー音楽講座：第三回」『映画之友』第13巻12号, 56-57.
——— 1935.12 「トーキー音楽講座：第四回」『映画之友』第13巻13号, 50-51.
——— 1936.4 「トーキー撮影所の音楽部の仕事」『音楽世界』第8巻4号, 68-72.
——— 1937.5.11 「映画に於ける音楽効果」『キネマ旬報』第610号, 8.
——— 1942 『音楽五十年史』東京：鱒書房.
——— 1968 『音楽明治百年史』東京：音楽之友社.
堀口劍子 1921.11 「旧劇映画改造論（説明劇製作の急務に就て）」『活動倶楽部』第4巻11号, 30-31.
前田璣 1929.7 「トーキーは造花だ」『フィルハーモニー』第3巻7号, 8.
松井翠声 1930.2.11 「レコード伴奏選曲の仕方」『キネマ旬報』第356号, 103-104.
——— 1930.4 「レコード伴奏選曲の仕方--アスファルトに就いて」第361号, 25.
——— 1931 『映画音楽全般』東京：春陽堂.
——— 1931.1 「映畫館欄 「アジアの嵐」選曲表」『キネマ旬報』第387号, 25.
松平信博 1924.7 「伴奏楽作曲の所感音楽の持つ尊き使命」『音楽と映画』第3巻7号, 3.
——— 1930.5.10 「邦画伴奏を新に作曲せよ」『国際映画新聞』第39号, 16-18.
——— 1931 「序言」『映画伴奏曲粋 第一集』東京：ビクター出版社.
——— 1937.8.15 「映画館伴奏音楽の回顧」『国際映画新聞』第202号, 26-27.
松野信太郎 1930.4.1 「トーキー雑感」『キネマ旬報』第361号, 67.
圓山一郎 1931.12.5 「レコードを利用する映画館の新しい音楽プレゼンテーション」『国際映画新聞』第67号, 30.
——— 1932.1.20 「トーキー再生装置に依るレコード伴奏の利用効果」『国際映画新聞』第70号, 27.
水澤武彦 1915.9「活動写真劇脚色上の研究：成功せる活動写真劇構成上の考究（第一回）」『キネマ・レコード』第5巻27号, 2-3.
——— 1915.10.10 「活動写真劇脚色上の研究（第二回）」『キネマ・レコード』第5巻28号, 3-5.
水町京子 1934.12 「ちいさな吐息：「歌祭三度笠」を非難する」『日活』第5巻12号, 93-95.
緑川春之助 1923.2 「新派臭と新派式」『活動画報』第7巻2号, 116-118.
三宅厳 1925.7 「富士館の現在の興行方針に」『活動雑誌』第11巻7号, 110.
夢想兵衛 1923 『映画説明の研究』東京：朝陽社.
村尾薫 1926.7 「シネマ音楽1〔：フイチユアーの伴奏音楽〕」『映画と演藝』第3巻7号,

31.
——— 1926.8 「シネマ音楽 2：フラシユバツクの音楽」『映画と演藝』第 3 巻 8 号, 31.
——— 1926.9 「シネマ音楽 3：喜劇の伴奏」『映画と演藝』第 3 巻 9 号, 47.
——— 1926.10 「シネマ音楽 4：無伴奏の特殊効果」『映画と演藝』第 3 巻 10 号, 30.
——— 1926.12 「シネマ音楽 5：伴奏の実際」『映画と演藝』第 3 巻 12 号, 31.
——— 1927.3 「映画音楽漫語」『映画往来』第 3 巻 3 号, 40-41.
——— 1927.12 「戦艦「くろがね号」と「ビッグ・パレード」の伴奏楽」『映画往来』第 3 巻 12 号, 28-31.
——— 1928.5 「つばさの伴奏楽 邦楽座の演出」『映画評論』第 4 巻 5 号, 422-24.
——— 1928.6 「『最後の命令』の伴奏楽（南明座）」『映画評論』第 4 巻 6 号, 498-501.
——— 1928.7 「『大岡政談』の伴奏楽（富士館）」『映画評論』第 5 巻 1 号, 54-57.
——— 1928.7.10 「映画演出者出でよ」『国際映画新聞』第 17 号, 17-18.
——— 1928.8 「伴奏楽と説明の調和」『映画評論』第 5 巻 2 号, 133-36.
——— 1928.10 「『ベルリン』の伴奏楽」『映画評論』第 5 巻 4 号, 308-310.
——— 1928.11 「「サンライズ」の伴奏楽」『映画評論』第 5 巻 5 号, 425-27.
——— 1929.6.16 「週間映画　レコード伴奏の流行」『東京朝日新聞』, 5.
——— 1930.5 「レコード伴奏の可否」『国際映画新聞』第 39 号, 14-15.
——— 1931.4.20 「音楽欄　日本映画伴奏の改善策」『国際映画新聞』第 52 号, 24-25.
——— 1938.6 「映画音楽のちかごろ：文化映画を中心として」『映画評論』第 18 巻 16 号, 109-15.
村上久雄 1933.12.11 「主要日本映画批評　丹下左膳第一篇」『キネマ旬報』第 491 号, 98-99.
森岩男 1929.2 「小山内薫氏と映画」『映画時代』第 6 巻 2 号, 5-7.
柳原近喜 1926.3 「日活春秋：『人間』にて感じたまゝを」『大日活』第 3 巻 3 号, 66.
藪重三郎 1930.12 「常設館の問題」『映画往来』第 6 巻 8 号, 24-25.
山田耕作 1925.7 「映画と音楽が握手する時代」『活動雑誌』第 11 巻 7 号, 109.
大和哲郎 1921.9 「音楽、説明、字幕概論」『活動倶楽部』 第 4 巻 9 号, 95.
山本緑葉 1924.11.21 「主要映画批評　恋の謙信」『キネマ旬報』第 178 号, 21.
——— 1925.3.11 「主要映画批評　水兵の母」『キネマ旬報』第 188 号, 28.
山本孝太郎 1935.5.1 「主要映画批評　紺屋高尾」『キネマ旬報』第 539 号, 121.
吉岡鳥平 1921 『甘い世の中：鳥平漫画』東京：弘学館.
吉川速男 1926 『活動写真の写し方』東京：アルス.
吉田武三 1930 「発声映画の常識」国際映画通信社編『日本映画事業総覧. 昭和 5 年版』東京：国際映画通信社, 759-67.
吉村公三郎 1936.5 「トーキー監督と音楽的教養」『音楽世界』第 8 巻 5 号, 151-53.
吉山旭光 1924.7 「映画劇百話 其の五：島田晴誉伴奏楽及び休憩楽に就て」『活動雑誌』第 10 巻 7 号, 69.
——— 1933 『日本映画界事物起源』東京：シネマと演藝社.
——— 1938.2 「トーキー擬音の先駆者 形容音楽の昔ばなし」『映画と音楽』第 2 巻 2 号,

56.
吉山旭光他 1924.8 「女殺油地獄合評記」『蒲田』第 25 号, 35-42.
ラペエ、エルノ 1929.6.21 「映画伴奏に就いて（四）」松井翠声訳『キネマ旬報』第 334 号, 10.
——— 1929.7.1 「映画伴奏に就いて（五）」松井翠声訳『キネマ旬報』第 335 号, 10.
ロンドン、クルト 1944 『映画音楽の美学と科学 』津川主一訳 東京：楽苑社.
和田山滋 1932.5.11 「主要日本映画批評 銀座の柳」『キネマ旬報』第 435 号, 66.
——— 1932.5.21 「主要日本映画批評 熊の八ツ切り事件」『キネマ旬報』第 436 号, 69.
——— 1932.6.1 「日本トーキーに絡む」『キネマ旬報』第 437 号, 42-43.
——— 1932.8.11 「日本映画批評欄 旅は青空」『キネマ旬報』第 479 号, 61.
——— 1932.9.11「五所平之助との一問一答」『キネマ旬報』第 447 号, 38-39.
——— 1933.1.11 「小津安二郎との一問一答」『キネマ旬報』第 458 号, 46-47.

一次文献（無記名記事）

『映画年鑑 大正十三年、十四年』1925 「楽士名簿」, 294-368.
『活動画報』 1917.3（第 1 巻 3 号）「封切写真合評 三友館の『大尉の娘』」, 140-41.
『活動画報』 1923.9（第 9 巻 9 号）「自由論壇女と海賊を観て」, 176.
『活動雑誌』 1919.10（第 5 年 10 号）「東京市内常設館評判記：西洋気分の金春館」, 162-63.
『活動雑誌』 1920.12（第 6 巻 12 号）「松竹キネマの改造：株式会社として将に雄飛せんとす」, 139.
『キネマ旬報』 1919.9.1（第 6 号）「外国映画常設館市内集合を叫ぶ」, 1.
『キネマ旬報』 1919.10.11（第 10 号）「各館普通席より 帝国館」, 2.
『キネマ旬報』 1920.1.21 （第 20 号）「各館普通席より 金春館」, 4.
『キネマ旬報』 1931.4.1 （第 397 号）「旬評 日本トーキーへの曙光」, 8.
『キネマ旬報』 1934.12.11（第 526 号）「主要日本映画批評（帰去来峠前篇）」, 87.
『キネマ旬報』 1935.1.11（第 528 号）「全国映画界行脚座談会 第二篇」, 27-30.
『キネマ旬報』 1935.1.21（第 529 号） 広告「深川情話」, 64.
『キネマ旬報』 1938.10.11（第 660 号）「主要日本映画批評（石童丸）」, 66.
『キネマ・レコード』 1916.5「第一新聞の発刊」第 4 巻 35 号, 200.
『東京朝日新聞』 1921.4.9 「休憩中の奏楽問題」.
『東京朝日新聞』 1929.6.11 「邦楽座はついに楽人全部を解雇す 革命的なトーキーの出現に脅かされる楽人達」.
『東京朝日新聞』 1930.2.27
『東京朝日新聞』 1932.4.19「新映画評『熊の出る開墾地』（不二映画）」.
『東京朝日新聞』 1933.5.23「新映画評 商才と芸術良心 気品なき「19 の春」 五所監督と伏見信子（松竹蒲田映画）」.
『東京朝日新聞』 1934.12.28「春の浪曲映画 ぞろりと並んで 5 本封切」.

『東京朝日新聞』 1935.3.20 「松竹経営映画館できょう総罷業決行　トーキーに追わるる楽士達、いよいよ背水の陣」.
『東京朝日新聞』 1936.6.23「新映画評「兄いもうと」（PCL 映画） 木村監督の気魄 新鮮なる印象を欣ぶ」.
『東京演芸通信』 1924.4.13（第 998 号）「映画」.
『東京演芸通信』 1924.4.24（第 1008 号）「映画」.
『東京演芸通信』 1924.5.2（第 1016 号）「映画」.
『東京演芸通信』 1924.5.12 （第 1026 号）「映画」.
『琵琶新聞』 1924.6（第 178 号）「五月十五日　浅草公園大勝館前にて撮影」, 15.
『琵琶新聞』 1925.1（第 185 号） 「映画琵琶劇の隆盛」, 13.
『ミュージックトレード』 1973.4 「喇叭太平記 15 島田晴誉」.
『横浜貿易新報』 1913.4.21 「オデヲン座管弦楽と替り」, 7.
『横浜貿易新報』 1916.4.27 「カビリヤ　オデヲンの呼物明後日から興行」.
『読売新聞』 1924.3.29 「日活に新に作曲部」.
『読売新聞』 1924.10.18 「小唄の歌い女 1　縁日の提琴で宣伝した映画」.
『読売新聞』 1924.10.19 「小唄の歌い女 2　声シヤンの松下京子」.
『読売新聞』 1932.3.16「新映画評 満州行進曲」.
『読売新聞』 1935.11.11「邦楽映画に乗出す日活」.

二次文献（邦訳・邦語文献）

秋山邦晴 1974 『日本の映画音楽史 1』東京：田畑書店.
――― 2003 『昭和の作曲家たち：太平洋戦争と音楽』東京：みすず書房.
板倉史明 1999 「「伊藤話術」とはなにか：伊藤大輔論序説」 *CineMagaziNet!,* Vol. 3.
（http://www.cmn.hs.h.kyoto-u.ac.jp/CMN3/text7.html） 2018 年 11 月 7 日確認
――― 2005 「「旧劇」から「時代劇」へ」岩本憲児編『時代劇伝説』東京：森話社, 89-114.
――― 2010 「映画館における観客の作法」黒沢清他編『日本映画は生きている 1』東京：岩波書店, 227-49.
井上雅雄 2002 「戦前昭和期映画産業の発展構造における特質：東宝を中心として」『立教經濟學研究』第 56 巻 2 号, 1-24.
今田健太郎 2000 「無声映画の音」『東洋音楽研究』第 65 号, 33-53.
――― 2004 「活動写真の興行とその視聴体験の諸相：二十世紀初頭の日本における音と映像の関係」『フィロカリア』第 21 号, 15-24.
――― 2012 「歌舞伎の陰囃子と無声映画の和洋合奏を比較する」後藤静夫編『近代日本における音楽・芸能の再検討』京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究報, 57-67.
岩本憲児 2007 『サイレントからトーキーへ：日本映画形成期の人と文化』東京：森話社.
――― 2016 『「時代映画」の誕生：講談・小説・剣劇から時代劇へ』東京：吉川弘文館.
上田学 2012 『日本映画草創期の興行と観客』東京：早稲田大学出版部.

――― 2014 「映画以前の視覚文化の諸相：日清戦争期の京都における幻燈と見世物」『立命館文学』 第 635 号, 145-153.
――― 2016 「弁士の系譜：政治演説から無声映画へ」『比較日本文化研究』第 18 号, 16-28.
大石雅彦 2015 『エイゼンシテイン・メソッド：イメージの工学』東京：平凡社.
大久保遼 2015 『映像のアルケオロジー：視覚理論・光学メディア・映像文化』東京：青弓社.
鴻英良 2017 「アルカイズムは未来主義を刺激する：エイゼンシテインと歌舞伎」永田靖・上田洋子・内田健介編『歌舞伎と革命ロシア：一九二八年左団次一座訪ソ公演と日露演劇交流』東京：森話社, 215-38.
大森盛太郎 1986 『日本の洋楽：ペリー来航から 130 年の歴史ドキュメント第 1 巻』東京：新門出版社.
小川佐和子 2016 『映画の胎動： 1910 年代の比較映画史』東京：人文書院.
荻野寧 1978-82 『西銀座・金春館小史』全 3 巻 私家版.
奥中康人 2012 『幕末鼓笛隊：土着化する西洋音楽』吹田：大阪大学出版会.
――― 2014 『和洋折衷音楽史』東京：春秋社.
尾鼻崇 2016 『映画音楽からゲームオーディオへ：映像音響研究の地平』京都：晃洋書房.
加藤幹郎 2006 『映画館と観客の文化史』東京：中央公論新社.
紙屋牧子・白井史人・柴田康太郎 2015 「1920 年代半ば以降の日活直営館における無声映画伴奏：「ヒラノ・コレクション」からみる伴奏曲レパートリーの形成と楽譜配給」早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編 『演劇研究』第 39 号, 15-55.
神山彰 2014 「節劇・剣劇・女剣劇」『忘れられた演劇 （近代日本演劇の記憶と文化） 』東京：森話社, 241-276.
唐鎌祐祥 2017 『かごしま映画館百年史』鹿児島： 南日本新聞開発センター, 106.
貴田庄 2015 『志賀直哉、映画に行く：エジソンから小津安二郎まで見た男』東京：朝日選書.
北田暁大 2004 「声の消長：徳川夢声からトーキーへ」『〈意味〉への抗い』東京：せりか書房.
木下千花 2016 『溝口健二論 映画の美学と政治学』東京：法政大学出版局.
木全公彦 1999 「あんなに浪曲映画を楽しんできたのに」、『唄えば天国 地の巻』東京：メディアファクトリー, 194-205.
倉田喜弘 1980 『明治大正の民衆娯楽』東京：岩波書店.
――― 2006a 『芝居小屋と寄席の近代：「遊芸」から「文化」へ』東京：岩波書店.
――― 2006b 『日本レコード文化史』東京：岩波書店.
杵屋栄左衛門 1976 『歌舞伎音楽集成 江戸編』 東京：「歌舞伎音楽集成」刊行会.
――― 1980 『歌舞伎音楽集成 上方編』 東京：「歌舞伎音楽集成」刊行会.
コーエン、アナベル・J [2001]2008 「映画における感情の源泉としての音楽」永岡都訳, P.N. ジュスリン、J.A.スロボダ編『音楽と感情の心理学』大串健吾・星野悦子・山田真司監訳 東京：誠信書房, 160-91.

古賀 太 1985 「映画音楽の考古学的一考察」『映画学』第 1 号, 57-66.
——— 1990 「戦前の映画統制の映画史的意味」『映像学』第 41 号, 24-34.
国際映画通信社編 1930 『日本映画事業総覧. 昭和 5 年版』東京：国際映画通信社.
児玉竜一 2010 「人形浄瑠璃と映画：語り物の映像化」神山彰・児玉竜一編『映画のなかの古典芸能』東京：森話社, 108-13.
小松弘 1999 「ヒストリオグラフィーと概念の複数性：大活を歴史化するために」『映画学』第 13 号, 2-11.
——— 2003 「旧劇革新の歴史的意義」『演劇研究センター紀要 I 』早稲田大学 21 世紀 COE プログラム、第 1 号, 163-173.
——— 2004 「モダニズムの成立：一九二七年における日本映画の状況」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第 50 号, 25-42.
——— 2010 「新派映画の形態学：震災前の日本映画が語るもの」黒沢清他編『日本映画は生きている 2：映画史を読み直す』東京：岩波書店.
——— 2012 「一九二三年以前の日本における映画館と上映形態：その美学的文化的特質」『演劇映像』第 53 号, 1-10.
——— 2014 「比較映画史への展望：無声映画記述における映画の内側と外側の問題」『演劇映像』第 55 号, 1-13.
——— 2018 「初期日本映画史をどう捉えるか」『文化資本研究』第 1 号, 222-34.
近藤和都 2018 「オフ・スクリーンのメディア史：戦前期日本の映画館プログラムをめぐる〈読むこと〉〈書くこと〉〈観ること〉」東京大学大学院情報学環・学際情報学府、博士論文.
笹川慶子 2003 「小唄映画に関する基礎調査：明治末期から昭和初期を中心に」『演劇研究センター紀要』第 1 号, 175-196.
——— 2004 「音楽映画の行方：日中戦争から大東亜戦争へ」『日本映画とナショナリズム 1931-1945』東京：森話社, 319-354.
——— 2010a 「継承された音：日本映画のサウンド化と浪曲トーキーの構造」山田幸平編『現代映画思想論の行方：ベンヤミン、ジョイスから黒澤明、宮崎駿まで』京都：晃洋書房.
——— 2010b 「忘却された音：浪曲映画の歴史とその意義」神山彰・児玉竜一編『映画のなかの古典芸能』東京：森話社.
——— 2018 『近代アジアの映画産業』東京：青弓社.
佐崎順昭 2015a 「日本におけるサイレント映画の受容環境（上）：映画説明者による「上演」の要素」『NFC ニューズレター』第 123 号, 4-5.
——— 2015b 「日本におけるサイレント映画の受容環境（下）：伴奏音楽の変遷と『映画伴奏事典』」『NFC ニューズレター』第 124 号, 11-13.
佐相勉 2002 『溝口健二・全作品解説 2：日活京都スランプ時代』東京：近代文芸社.
——— 2008 『溝口健二・全作品解説 5：初の鏡花もの『日本橋』』東京 ： 近代文芸社.
佐藤和道 2017 「メディアと能楽：レコード・ラジオ・トーキー」『 近代日本と能楽』 東京：野上記念法政大学能楽研究所共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究拠点」, 133-61.

佐藤忠男 2006 『日本映画史第 1 巻増補版』 東京：岩波書店.
サブリナ・エレオノーラ 1998 「日本におけるロシアのインテリゲンチャ―：ミハイル・ペトローヴィチ・グリゴーリエフの生涯と創造」滝波秀子訳、『早稲田大学図書館紀要』第 45 号, 31-42.
佐宮圭 2011 『さわり』東京：小学館.
澤井万七美 2010 「琵琶と活動写真／映画：明治末から大正期の状況」『演劇学論叢』第 11 号, 215-33.
――― 2014 「琵琶劇とその周辺」神山彰編『忘れられた演劇』東京：森話社.
ジェロー、アーロン 1995 「弁士の新しい顔：大正期の日本映画を定義する」『映画学』第 9 号, 55-73.
――― 2010 「弁士について」黒沢清・ 四方田犬彦・ 吉見俊哉・ 李鳳宇編『映画史を読み直す』東京：岩波書店.
シオン、ミシェル 1993 『映画にとって音とはなにか』川竹英克・J. ピノン訳、東京：勁草書房.
――― 2002 『映画の音楽』小沼純一・北村真澄監訳、東京：みすず書房.
柴田康太郎 2015 「1930 年代後半の日本映画における「リアリズム」と深井史郎の映画音楽」『美学』第 66 巻 1 号, 173-184.
――― 2017「日活作曲部における松平信博の無声映画伴奏：純映画劇運動への音楽的応答」『演劇研究』第 40 号 , 131-151.
――― 2018 「大正期の日本映画における伴奏音楽の「洋楽化」と純映画劇運動」『演劇研究』第 41 号.
清水瀧治 1957 「暗闇の中の人々：大村能章貧乏物語」『レコード会社：ある文芸部長の切抜帖から』東京：東京ライフ社, 90-92.
白井史人 2016「1920 年代の邦画伴奏への選曲にみられる折衷的性格：日活配給選曲譜『軍神橘中佐』と楽士手稿選曲譜の分析から」『演劇研究』第 40 号, 43-65.
――― 2017 「無声期の邦画伴奏における手稿譜の使用実態：無声映画伴奏譜「ヒラノ・コレクション」の筆跡調査と音色表現の分析」『演劇研究』第 41 号, 35-58.
――― 2018 「音楽的想念の変容、シェーンベルクから後続世代へ：1920～30 年代のドイツ映画との関係から」東京大学大学院総合文化研究科博士論文.
杉山千鶴 2002 「1920 年代の浅草における映画館アトラクション」『舞踊学』第 22 号, 20-31.
――― 2007 「昭和初期における河合澄子の活動：映画館のアトラクションと浅草レヴューにおいて」『早稲田大学演劇博物館 21 世紀 COE 演劇研究センター『COE 演劇研究センター紀要』第 8 号, 305 – 309.
園部三郎 1950 『音楽五十年』東京：時事通信社.
――― 1977『日本人と音楽趣味』東京：大月書店.
大傍正規 2007 「日本映画伴奏の改善から前衛へ」 *CineMagazinet!,* No. 11.
（http://www.cmn.hs.h.kyoto-u.ac.jp/CMN11/daibou-musicology.html）2018 年 11 月 7 日確認

――― 2013 「仏・露・日における無声映画の音：初期フランス映画の受容研究」京都大学大学院人間・環境学研究科共生人間学専攻博士論文.
高岡智子 2014 『亡命ユダヤ人の映画音楽：20 世紀ドイツ音楽からハリウッド、東ドイツへの軌跡』京都：ナカニシヤ出版.
武石みどり 2006 「ハタノ・オーケストラの実態と功績（4.日本をめぐる論考　徳丸吉彦先生古稀記念論文集）」『お茶の水音楽論集』, 363-373.
田中純一郎 1975a 『日本映画発達史 I：活動写真時代』東京：中央公論社.
――― 1975b 『日本映画発達史 II：無声からトーキーへ』東京：中央公論社.
谷口紀枝 2012 「初期時代の日本映画における演技形態の変遷：型の演技から表情の演技へ」『演劇映像学』, 167-186.
――― 2013 「各社競作『毒草』に見る大正 6 年の日本映画界：連鎖劇の流行と日活向島撮影所」『演劇映像学』, 210-194.
千葉伸夫 1976 「『生の輝き』から『雄呂血』まで」『世界の映画作家 31 日本映画史』東京：キネマ旬報社, 22-36.
長木誠司 2010 『戦後の音楽：芸術音楽のポリティクスとポエティクス』東京：作品社.
塚原康子 2001 「楽隊と戦前の大衆音楽」阿部勘一・細川周平・塚原康子・東谷護・高澤智昌『ブラスバンドの社会史 ： 軍楽隊から歌伴へ』東京：青弓社, 83-149.
――― 2005 「戦前の東京における「邦楽」」E.クロッペンシュタイン・鈴木貞美編『日本文化の連続性と非連続性：1920 年-1970 年』東京：勉誠出版, 435-472.
鶴見俊輔 1985「日本近代の視聴覚文化」今村昌平他編『講座日本映画 1　日本映画の誕生』東京：岩波書店, 54-68.
東京都新宿区立新宿歴史博物館編 1992 『キネマの楽しみ：新宿武蔵野館の黄金時代』東京：新宿区教育委員会.
仲万美子 1999 「オーケストラの「響」への道程」『日本の作曲 20 世紀』東京：音楽之友社, 14.
長沢雅春 2001 「開化期韓国における“活動写真”の伝来と近代日本」『佐賀女子短期大学研究紀要」第 35 号, 13-24.
長門洋平 2014 『映画音響論：溝口健二映画を聴く』東京：みすず書房.
西村雄一郎 1994 『黒澤明：音と映像』東京：立風書房.
――― 2004 『黒澤明と早坂文雄：風のように侍は』東京： 筑摩書房.
永嶺繁敏 2010 『流行歌の誕生：「カチューシャの唄」とその時代』東京：吉川弘文館.
ノルドストロム、ヨハン 2014 「「トーキーは P・C・L」　P・C・L の音楽性がもたらしたもの：P・C・L 黎明期における音楽性の導入とレヴュー映画の発展」『演劇研究』第 37 号, 45-63.
ハーイ, ピーター・B 1995『帝国の銀幕：十五年戦争と日本映画』名古屋：名古屋大学出版会.
袴田麻祐子 2005 「寶塚少女歌劇にみる『西洋』の意味とその変化」『フィロカリア』第 22 号, 35-52.

――― 2007 「オペラの日本化」渡辺裕・徳丸吉彦・細川周平・高橋悠治編著『世界音楽の本』東京：岩波書店, 394-399.
長谷正人 1994.11 「検閲の誕生：大正期の警察と活動写真」『映像学』第 53 号, 124-138.
兵藤裕己 2000 『〈声〉の国民国家：浪花節が創る日本近代』東京：NHK ブックス.
藤井仁子 1999 「日本映画の 1930 年代」『映像学』第 65 号, 21-37.
――― 2001 「文化する映画：昭和十年代における文化映画の言説分析」『映像学』第 66 号, 5-22.
藤岡篤弘 2002 「日本映画興行史研究：1930 年代における技術革新および近代化とフィルム・プレゼンテーション」 *CineMagaziNet!,* Vol. 6.（http://www.cmn.hs.h.kyoto-u.ac.jp/CMN6/fujioka.html） 2018 年 11 月 7 日確認
藤川治水 1995 「活動写真の頃」熊本大学・映画文化史講座編『映画この百年：地方からの視点』東京：亜紀書房, 35-49.
藤木秀朗 2007 『増殖するペルソナ：映画スターダムの成立と日本近代』名古屋：名古屋大学出版会.
福島加奈子 2018 「大正期から昭和初期における齣フィルムの蒐集と文化」『映像学』第 99 号, 46-68.
細川周平 2002 「小唄映画の文化史」『シネマどんどん』第 1 号, 12-15.
堀切直人 2005 『浅草　大正篇』東京：右文書院.
前川公美夫編 2008 『頗る非常！：怪人活弁士・駒田好洋の巡業奇聞』東京：新潮社.
前田愛 1985 「盛り場に映画館ができた」今村昌平他編『講座日本映画 1 日本映画の誕生』東京：岩波書店, 338-58.
牧野守 1999 「『キネマ・レコード』時代と映画常設館」牧野守監修『復刻版 キネマ・レコード（第 II 期第 1 巻）』東京：国書刊行会, 27-45.
正清健介 2018 「小津安二郎映画の音：秘められた遊び」一橋大学大学院言語社会研究科博士論文.
松平信泰 2004 『父を語る 松平信博の思い出』豊田：松平親氏公顕彰会.
真鍋昌賢 2016 『浪花節　流動する語り芸：演者と聴衆の近代』東京：せりか書房.
丸岡澄夫 1975 『オデヲン座物語』横浜：六崎彰.
水町青磁 1940.7.21 「日本映画批評　続清水港」『キネマ旬報』第 722 号, 55-56.
御園京平 1982.11 「琵琶と浪曲劇」『御園京平楽書帳：私家版』東京：御園京平、1999, 46-47.
――― 1990 『活弁時代』東京：岩波書店.
溝渕久美子 2005 「「文芸復興」としての「文芸映画」」『映像学』第 75 号, 65-81.
三船清 1985 「活動写真の大スター尾上松之助」今村昌平他編『講座日本映画 1 日本映画の誕生』東京：岩波書店, 128-49.
山中十志雄・丸岡澄夫 1977-78 「横浜オデヲン座上映作品記録」第１、２回『映画史研究』第 10-11 号.
山本喜久男 1983 『日本映画における外国映画の影響：比較映画史研究』東京：早稲田大学

出版部.
山本直樹 2010 「トーキー・リアリズムへの道」黒沢清、四方田犬彦、吉見俊哉、李鳳宇『映画史を読み直す』東京：岩波書店, 211-39.
横溝良夫 1992 「新宿武蔵野館」東京都新宿区立新宿歴史博物館編『キネマの楽しみ：新宿武蔵野館の黄金時代』東京：新宿区教育委員会, 47-74.
吉田智恵男 1978 『もう一つの映画史：活弁の時代』東京：時事通信社.
吉見俊哉 2008 『都市のドラマトゥルギー：東京・盛り場の社会史』東京：河出書房新社.
渡辺大輔 2011 「初期映画に見る見世物性と近代性」岩本憲児編『日本映画の誕生』東京：森話社, 209-40.
渡辺裕 1997 『音楽機械劇場』東京：新書館.
——— 1999 『宝塚歌劇の変容と日本近代』東京：新書館.
——— 2002 『日本文化モダン・ラプソディ』東京：春秋社.
——— 2013 『サウンドとメディアの文化資源学：境界線上の音楽 』東京：春秋社.
——— 2017 『感性文化論：〈終わり〉と〈はじまり〉の戦後昭和史』東京：春秋社.
渡辺裕他 2007 「日本音楽の 20 世紀」徳丸吉彦・北中正和・渡辺 裕・高橋悠治編『事典世界音楽の本』東京：岩波書店, 366-444.

二次文献（外国語文献）

Altman, Rick. 1996. “The Silence of the Silents,” *The Musical Quarterly,* Vol. 80, No. 4 (Winter, 1996), 648-718.
———. 2001. “The Living Nickel Odeon,” in Richard Abel and Rick Altman ed. *The Sounds of Early Cinema*, Bloomington: Indiana University Press, 2001, 234–37.
———. 2004. *Silent Film Sound,* New York: Columbia University Press, 2004
———. 2007. “Early Film Themes: Roxy, Adorno, and the Problem of Cultural Capital” in Daniel Goldmark, Lawrence Kramer, Richard Leppert ed. *Beyond the Soundtrack: Representing Music in Cinema*. Berkley: University of California Press
Barnier, Martin. 2010. *Bruits, cris, musiques de films. Les projections avant 1914*. Rennes: Presses Universitaires de Rennes.
Brown, Julie and Annette Davison. 2013. *The Sounds of the Silents in Britain*. Oxford: Oxford University Press.
Buhler, James and David Neumeyer. 2016. *Hearing the Movies: Music and Sound in Film History*. 2nd edition. Oxford: Oxford University Press.
Buhler, James and Hannah Lewis. 2016. "Evolving Practices for Film Music and Sound, 1925–1935," in Mervyn Cooke and Fiona Ford ed. *The Cambridge Companion to Film Music*. Cambridge: Cambridge University Press, 7-28
Buhler, James and Watts, Catrin. 2014. “The *Moving Picture World*, W. Stephen Bush and the American Reception of European Cinema Practices, 1907-1913,” in Claus Tieber and Anna K. Windisch, *The Sounds of Silent Films*. Basingstoke: Palgrave MacMillan, 2014, 103-22.
Chion, Michel. [1990]1994. *Audio-vision：Sound on Screen.* trans. Claudia Gorbman,

New York: Columbia University Press.

Dym, Jeffrey A. 2003. *Benshi, Japanese Silent Film Narrators, and their Forgotten Narrative Art of Setsumei: a History of Japanese Silent Film Narration*. Edwin Mellen Press

Farquhar, Mary and Berry, Chris. 2005. "Shadow Opera: Toward a New Archaeology of the Chinese Cinema." in Sheldon H. Lu, Emilie Yueh-yu Yeh ed., *Chinese-Language Film: Historiography, Poetics, Politics*. Honolulu: University of Hawaii Press, 27–51.

Gerow, Aaron. 1994. "The Benshi's New Face: Defining Cinema in Taishô Japan," *Iconics* 3, 69-86〔アーロン・ジェロー「弁士の新しい顔：大正期の日本映画を定義する」若尾佳世乃訳『映画学』第 9 号, 1995, 55-73〕

———. 2000 "One Print in the Age of Mechanical Reproduction: Film Industry and Culture in 1910s Japan," *Screening the Past,* Vo. 11. (http://www.screeningthepast.com/2014/12/one-print-in-the-age-of-mechanical-reproduction-film-industry-and-culture-in-1910s-japan/)

———. 2010. *Visions of Japanese Modernity: Articulations of Cinema, Nation, and Spectatorship*, 1895-1925. Berkeley: University of California Press

Goehr, Lydia 1992. *The Imaginary Museum of Musical Works: An Essay in the Philosophy of Music.* Oxford: Oxford University Press.

Gorbman, Claudia. 1987. *Unheard Melodies: Narrative Film Music*, Bloomington: Indiana University Press.

Hansen, Miriam. 1991. *Babel and Babylon: Spectatorship in American Silent Film*. Harvard University Press.

Hosokawa Shuhei. 2014. "Sketches of Silent Film Sound in Japan Theatrical Functions of Ballyhoo, Orchestras and Kabuki Ensembles", Daisuke Miyao ed. *The Oxford Handbook of Japanese Cinema*. Oxford: Oxford University Press, 288-305.

Kalinak, Kathryn. 1992. Settling the Score: Music and the Classical Hollywood Film, Madison : University of Wisconsin Press

———. 2010. *Film Music: A Very Short Introduction*, Oxford: Oxford University Press.

———. 2014. "Performance Practices and Music in Early Cinema outside Hollywood," in David Neumeyer ed. *The Oxford Handbook of Film Music Studies*. Oxford: Oxford University Press, 2014

Komatsu, Hiroshi 1993a. "Japan: Before the Great Kanto Earthquake," in Geoffrey Nowell-Smith ed. *Oxford History of World Cinema*, Oxford; New York: Oxford University Press, 177-82.

———. 1993b. "The Classical Cinema in Japan," in Geoffrey Nowell-Smith ed. *Oxford History of World Cinema*, Oxford; New York: Oxford University Press, 413-422.

Komatsu, Hiroshi and Charles Musser. 1987. "Benshi Search," *Wide Angle* 9, no. 2, 73–90

Kozloff, Sarah. 1988. *Invisible Storytellers: Voice-Over Narration in American Fiction Film,* University of California Press.

Lastra, James. 2000. *Sound technology and the American Cinema: Perception, Representation, Modernity*. New York: Columbia University Press.

McMahan, Alison 2004. "Sound rewrites Silents." in Dominique Nasta and Didier Huvelle ed. *Le son en perspective: nouvelles recherches / New Perspectives in Sound Studies*. Peterlen: Peter Lang, 2004, 47-67.

Ogihara Junko 1990. "The Exhibition of Films for Japanese Americans in Los Angeles During the Silent Film Era," *Film History* 4(2), 81-87.

Prendergast, Roy M. 1992. *Film Music: a Neglected Art: a Critical Study of Music in Films*. 2nd edition. W.W. Norton

Slowik, Michael. 2014 After the Silents Hollywood Film Music in the Early Sound Era, 1926-1934, New York: Columbia University Press.

Targa, Marco. 2014. "The Use of Cue Sheets in Italian Silent Cinema: Contexts, Repertoires, Praxis," in Claus Tieber and Anna K. Windisch. *The Sounds of Silent Films*. Basingstoke: Palgrave MacMillan, 2014, 49-65

楽譜

映画音楽研究会編　1927　『映画伴奏曲集 時代劇』前編・後篇　東京：シンフォニー楽譜出版

映画伴奏楽会編　1927　『ハーモニカ時代劇映画伴奏名曲集』大阪：吉川奎盛堂（国立映画アーカイブ所蔵）

平山紫峰編　1927　『映画伴奏時代劇名曲集』　東京：オリエンタル楽譜出版社（個人蔵）

松平信博　1924　『シネマオーケストラ楽譜　第一集』東京：斎藤商店出版部（東京音楽大学所蔵）

――――　1931　『映画伴奏曲粋　第一集』東京：ビクター出版社（明治学院大学近代音楽館所蔵）

六郷宇十郎編　1931　『特選　時代映画伴奏曲集』第二編　東京：シンフォニー楽譜出版（マツダ映画社所蔵）

音源

『映画伴奏曲粋第一集』松平信博（作曲、指揮）　1933　日本ビクター, 52561-52566

『軍神橘中佐』谷天郎（説明）、日活管弦楽団（伴奏）西岡篁村（琵琶）, [c.1926] ニッポノホン, 16297-8.

『水兵の母』石井春波（説明）君塚篁陵（琵琶）SU オーケストラ（音楽）, [c.1926] Tokyo Record, 3234-3235

論文の内容の要旨

論文題目　戦前の東京における映画館の音楽文化
氏　　名　柴田　康太郎

本論文は、1910～30 年代に東京の映画館で行われていた音楽実践・音楽受容を事例として、映画館が音楽史と映画史の相互作用のなかで織りなした音楽文化の諸相を具体的に明らかにする試みである。先行研究によれば、初期映画がともなっていた音楽は各国・各地域で極めて多様であったが、サイレント映画の成熟期になると欧米の映画伴奏の様式や実践が次第に規範化して定着し、トーキー初期には伴奏音楽の洋楽化がいっそう進んだ。確かにこうした洋楽化というべき推移は同時代の様々な文献から確認できるものであるが、こうした指摘だけでは、大正～昭和初期の映画館が日本における洋楽受容においてどのような意味で重要な窓口として機能し、西洋音楽の土着化と大衆化のための文化装置としてどのように機能していたかを捉えることができない。また、改めて検討を進めると、この当時の映画伴奏の実践にはたんなる洋楽化ということでは捉えられない多様性があったことも確認できる。本論文では同時代の文献資料・楽譜資料・音源資料・映像資料などを複合的に考察することで、映画館の音楽実践・音楽受容が映画会社、撮影所、興行者、監督、観客などの様々な力学のなかでいかに展開していたのかを多角的に浮かび上がらせる。

本論文は 3 部構成をとる。

第 1 部では、サイレント期の東京における洋画専門館に注目し、輸入洋楽曲の管弦楽合奏という西洋的な演奏形態・伴奏形態の定着と土着化の諸相を考察した。洋画専門館は、欧米の映画館の音楽文化から最も影響を受けやすい場であり、また独特のかたちでその大衆化・土着化が進んだ場でもあった。第 1 章ではまず、映画上映の合間に行われた休憩奏楽と映画上映中の伴奏音楽の関係に光を当て、1920 年前後の浅草帝国館、銀座金春館等の映画館プログラムに掲載された観客の投稿文を分析した。これにより、映画観客の間で西洋音楽への関心が高まるなか、映画館が音楽会場ともいえるほどの活発な音楽受容の場になっていたことを示し、また歌詞をもたない器楽曲が映像を通して独特の意味作用をまとって聴取されるなど映画館特有の音楽受容が行われていたことを指摘した。

第 2 章では、洋画専門館の音楽伴奏における欧米からの影響を捉えるとともに、音楽伴奏と、日本で特に発達を見せた弁士の語りの文化（映画説明）の関係を考察した。洋画上映館ではキューシートなどを通して欧米の同時代の言説や実践が流入しやすかったため、欧米にはいない弁士の語りと欧米的な映画伴奏の間に摩擦が生じていた。ここでは映画草創期からサイレント黄金期までの映画雑誌を分析することにより、映画伴奏と映画説明の関係が様々な局面で問い直されてきた系譜とその変容過程を示した。

次いで第 2 部ではサイレント期の邦画上映館に注目し、邦画上映館において従来からの邦楽的な演出語法と洋楽的な演出語法とがどのように折衷されたのかを分析した。第 3 章

では純映画劇運動の前後に注目し、1920 年前後に起きた音楽的多様性の変容を、芝居上演を規範とする多様性から洋画上映を規範とする多様性への再編成として示した。帰山教正らの純映画劇運動やその後の松竹キネマの映画興行を取り上げることで、邦画伴奏に洋楽合奏が導入され、邦画上映館固有の土着化が始まるまでの推移を具体的に考察した。また最後に、1920 年代後半に流行した休憩奏楽におけるメドレー曲を取り上げ、第 1 章で示した休憩奏楽が 1920 年代後半の邦画上映館で更なる展開を迎えていたことを指摘した。

第 4〜6 章では、邦画伴奏に洋楽合奏が規範化した際、音楽実践がどのように再編成されたのかを日活の事例を軸に考察した。第 4 章では、1920 年代半ばの日活現代劇における洋楽伴奏の実態を検証すべく、日活が設置した「作曲部」による日活専用伴奏譜の整備、および作曲部長だった松平信博の実践を考察した。これにより、浅草三友館の松平信博による伴奏譜が日活専用楽譜として直営館内で共有されるなど、日活直営館内部では独自の楽譜配給網が作られていたこと、そしてキューシートや選曲譜の発行によって国内での音楽文化の再編成が目指されたことを指摘した。これに対し第 5 章では、洋楽伴奏が浸透する一方で強固に続いた琵琶弾奏の実践に分析をくわえ、琵琶弾奏と洋楽伴奏の関係に光を当てた。ここでは映画館における琵琶弾奏の実態を捉えるため、現存する SP レコードの音源や、映画会社と別の映画琵琶師の団体が作っていた琵琶台本群を考察し、邦楽実践と洋楽伴奏の混交状況を明らかにした。第 6 章では、時代劇という歌舞伎の邦楽的伝統が最も根強いジャンルにおいて西洋音楽がどのように土着化したかを検討すべく、神田日活館における田中豊明の言説と実践、浅草富士館の松平信博の実践を考察した。これによって、和洋合奏が 1924 年頃に定着したこと、また映画伴奏の洋楽化が心情的な場面やミステリアスな場面といった特定の場面から進んだことを指摘し、西洋的な音楽語法が規範化するプロセスを多面的に浮かび上がらせた。

最後に第 3 部では、トーキー初期の映画館を取り上げ、サイレント期に定着した伴奏音楽をめぐる音楽実践が映画のトーキーかを経てどのような再編成を遂げたのかを考察した。

第 7 章では、初期の洋画トーキーが日本の映画伴奏をめぐる議論と実践に与えた影響を検証した。まず初期の洋画トーキーが日本の映画界にとってトーキー映画における音楽演出のモデルとして受け止められるなかで、伴奏音楽を過去の遺物ととらえる伴奏音楽無用論や、映画の音楽演出としては現実音としての音楽のみが妥当だとする見方が現れていたことを指摘した。次に、同時期の邦画サウンド版映画を取りあげ、弁士の存在もふくめてサイレント期の慣習が残る一方、洋画トーキーの影響を受けながら現実音の音楽・音響表現が増加するなど、邦画作品でも 1930 年代初頭から多様なかたちで音響表現の変容が始まっていたことを指摘した。

第 8 章では、前章で取り上げた初期の伴奏音楽無用論を経てあらためて伴奏音楽が定着する 1930 年代半ばの邦画トーキーに注目し、この過程でどのような試行錯誤があったのかを検証した。まず 1930 年代半ばの映画撮影所の音楽部の仕事、特に PCL 作曲部の伊藤昇や松竹作曲部の早乙女光の仕事に注目し、サイレント期からの連続性（既成曲の使用）と不連続性（新作曲・編曲の増加）を分析した。次いで、音楽を映画の各場面に重ねるうえで行われた模索を島津保次郎や堀内敬三らの発言を軸に録音と映像との同期をめぐる議論に考

察をくわえた。最後に、こうした試行錯誤を経て映画伴奏の洋楽化が強化される一方、録音を通して同じ音楽が多様な観客層を対象とすることになったことで、あらためて多様な日本の観客層の音楽感覚に配慮した洋楽の使用が課題になっていたことを指摘した。

第 9 章では、日本映画における洋楽が規範化する一方でトーキー以後も根強く残った邦楽的実践として、浪曲映画の音形式とその受容を分析した。ここでは浪曲映画をサイレント期の琵琶映画の系譜に連なるものとして捉えるとともに、浪曲の存在がトーキー映画の枠組みのなかに位置づけられる際には、浪曲が当時「ナラタージュ」と呼ばれたボイスオーバーの手法に引き付けて理解されたことを指摘した。また、浪曲映画でも洋楽伴奏と浪曲が共存していたため、後半では現存作品の分析をもとに、作中の浪曲の使用法、および浪曲と音楽の関係の変化を考察した。

最後に第 10 章では、1930 年代後半におけるリアリズム映画への関心の高まりに刺激された伴奏音楽無用論を再検討し、トーキー時代の伴奏音楽をめぐる再編成の諸相をめぐって文献資料に考察をくわえた。まず、1930 年代前半から存在した伴奏音楽無用論がリアリズム映画論と結合したこと、またこれによって日本映画と西洋音楽の調和をめぐる問題が再燃していたことを示した。また、当時の代表的な映画音楽の作曲家であった深井史郎の議論と実践に注目して、当時の代表的な作曲家がリアリズム映画と伴奏音楽無用論の問題に対してどのように応答し、試行錯誤をしたのかを示した。

本論文は以上の分析を通して、戦前の日本における映画館の音楽文化が多様な関係者の関与、そして音楽史と映画史の絡み合いのなかで展開し、不断に再編成を繰り返してきたことを浮かび上がらせた。本論文では、映画音楽の歴史を従来のように映画監督や作曲家といった作家研究や作品研究の視点から捉えるのではなく、映画館をとりまく音楽実践とその受容という点から考察し、映画と音楽の関係の変容過程を映画館、映画会社、撮影所、興行者、監督、観客などの関与する複合的な力学を踏まえて文化史的に考察した。また、これまで分析されてこなかった多様な一次資料（映画館プログラム、無声映画伴奏譜、SP レコード、自筆譜、琵琶台本）に光を当てることで、映画館の音楽文化が管弦楽合奏・和洋合奏、囃子鳴物、琵琶、浪曲、歌唱まで多様な音楽・音響実践の絡み合うなかで生起し、また各局面における映画史的な転換のなかで不断に遂げた再編成を具体的に明らかにした。本論文の明らかにした映画史と音楽史の動態は、たんに映画音楽の研究のみならず、洋楽受容史研究、映画興行研究、その国際比較研究をふくめ隣接する様々な分野の研究に新たな視座を開くものと考えられる。